

Title	論文スキーマ形成に着目した専門日本語ライティング教育の開発 : 学習者の文章および文章評価能力の分析から
Author(s)	村岡, 貴子
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59133
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

本論文は、大学院レベルの日本語学習者が研究活動を円滑に遂行するために必要とする専門日本語ライティングの教育開発をテーマとしている。本稿では、関連の先行研究を概観して研究の位置づけを図った上で、「論文スキーマ」という主要概念を導入し、1) 学術論文の文章を対象とした構成や論理展開を分析し、2) 日本語学習者が作成した文章の分析から構造的な問題を明らかにし、3) ライティングの授業実践と学習者への調査分析から得られた知見をもとに、新たな専門日本語ライティング教育開発の考察と提言を試みることを目的とする。なお、本論文における「ライティング」は、日本の初等中等教育での国語科教育の「作文」指導と区別し、また、書かれた文章も書く活動をも指すことがある「作文」ではなく、第二言語学習者としての日本語学習者（以下、学習者）による「書く」活動自体を広く示すこととする。また、大学院での研究活動で必要なライティング活動を「専門日本語ライティング」（以下、ライティング）、学習者が作成した文章は一律に「文章」と呼ぶ。以下、論文の章ごとに内容の要旨を記述する。

第1章では、日本語教育学にも多くの知見を提供した先進的な例として英語教育学におけるライティング教育研究の流れを示した中で、English for Academic Purposes Approach やコーパス言語学の応用等について概観した。また、日本語教育学のライティング教育研究として、特に1983年の「留学生10万人計画」以降活発になった「専門日本語教育」の研究を概観した。そこでは、従来、日本語の話しことばの教育研究とは異なり、ライティングの教育研究においては一文レベルの文法や表現の正確さに最も関心が注がれ、文章の構成や論理展開等のマクロな観点や、学習者のライティング過程やフィードバックの方法については、十分に検討されていなかった背景に言及した。さらに、比較的新しい流れとして、協働的な日本語ライティング学習に関する研究や教材開発が徐々に進みつつある現状を述べた。

第2章では、本論文で用いたデータの詳細や具体的な方法について示し、かつ、全9章から成る論文全体の構成を図式化することによって各章における記述内容の概略を示した。

第3章では、「専門日本語」と「専門日本語教育」の解釈について先行研究を引用しつつ考察し、また、「専門日本語教育」の観点から、特に論文作成支援を目指した文章や文体に関する先行研究を概観した上で、本研究の位置づけを図った。「専門日本語」は、当初研究されていた学術的な専門分野別日本語から、各種職業場面での日本語まで、対象範囲も方法論も多様化した。1990年代頃から盛んに調査分析されてきた学術論文等の「専門日本語」の傾向は、専門用語をはじめとする「内容語」より、接続表現や助詞相当語句等の「機能語」や品詞別語彙の研究が比較的多いと言える。また、理工学系、農学系、および社会科学系の学術論文を対象とした構成や論理展開の分析も徐々に増え、文章というマクロな視点からの知見が提供されてきた。これらの成果をふまえ、本論文では、大学院レベルの学習者に必要な学術論文の日本語として、特に文体と表現、文章の構成、および論理展開について分析することを述べた。また、「専門日本語教育」は、コースデザインの前提として、学習者が特定のニーズと明確な学習目的を有していることから、関連の多くの人的リソースの活用も必要な「固有の現場」に特化した日本語の教育であると考えられた。

第4章では、留学生指導教員から研究遂行上重要であると推薦を得た、複数の理系分野の学会誌に掲載された原著論文（以下、論文）を対象に、特に導入部分として論述が困難とされる「緒言」部分を例として、構成や論理展開といったマクロな視点から分析し、大学院レベルの学習者が作成を目ざす学術論文という文章の質の把握を試みた。その分析では、Swales (1990) *のジャンル分析の概念を参照しつつ、当該理系論文の緒言部分における論理展開の様相について、独自に考察した「構成要素」の概念を用い、形式段落によって各構成要素の出現位置に留意しながら考察した。緒言の文章は「領域提示」、「研究動向提示」、「課題設定」、および「論文概要紹介」の4構成要素が、各々特定の段落に配置され、接続表現等の特定の表現が構成要素の特定の位置に出現しやすいことが明らかとなった。これらのことから、学習者が、論文や研究とは何かの概念知識（論文スキーマ）を理解し内化していくために、構成と論理展開を示して表現を組み込んだ文章展開の図式化を試み、ライティング教育用シラバスの基礎資料を得た。

第5章では、ライティングのための語彙・表現の指導について、実際の学習者の問題例の分析を通じ、1) 文章ジャンルによる語彙選択、2) 文章の論理展開にかかわる表現、3) 教育・学習リソースの選択の3点から論じた。これは、学習者の文章が含む具体的な問題や弱点を捉えて分析することにより、ライティング教育の方法を再検討するためである。上記の1)は、ライティング教育において避けて通れない重要な学習事項であるが、一般に、日本語によるサバイバルのための話しことばを中心とした教育を優先的に受けてきた学習者は、必ずしも文章ジャンルに応じた文章語の習得が十分ではない。そのことを表す具体的な事例を提示し、語彙選択の重要性を指摘した。次に、2)については、接続表現をはじめとして論理展開に深く関与する表現の問題を示した上で、文脈の正確な把握のもとでの指導の重要性について論じた。3)については、上記の2点に関連してライティング教育の充実に適したリソースのあり方について、文章ジャンルの認識や論理展開の把握に有用なコーパスの貢献に言及し、今後の可能性を述べた。

第6章では、大学院レベルの学習者が作成した日本語の文章の構成や論理展開の問題を分析しパターンとして捉え

[25]

氏名	村岡貴子
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第25552号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	論文スキーマ形成に着目した専門日本語ライティング教育の開発—学習者の文章および文章評価能力の分析から—
論文審査委員	(主査) 教授 沖田 知子 (副査) 教授 岩根 久 准教授 小口 一郎

うる問題の抽出を試みた。3つのマクロな観点、すなわち、1)目的と構造化、2)関連と意義付け、3)厳密さと文体の最適化、から問題の分類が可能であった。ライティングにおいてはこの3点のいずれが不十分であっても成功しないもので、従来の日本語作文教育に関する研究では、本格的には取り上げられていなかったものの、論文作成を目指すライティングの教育や学習支援では、重要な項目であると考えられた。また、本来、文章の構成と論理展開は、文章の中心的主張・概念とそれを支える主張・概念との関係の具体化と捉えられるため、それらに関する問題は、基本的には中心的主張に収斂していくべき概念間の構造の認識に関係すると考えられた。学習者がこのような局所的適切性を超えるレベルの問題を克服するためには、上記3点への意識化を積極的に促す学習活動が有用であると考えられた。

第7章では、実際のライティング教育実践において、筆者が開発した「テキスト分析タスク」という協働的な学習活動を通して文章の構成や論理展開の重要性を学習者に意識化させる過程を導入し、その効果を、授業後のアンケート、他者が作成した複数の未知の文章の比較と評価、および個別インタビューから検証した。「テキスト分析タスク」とは、同一のトピックで作成されたクラスメート等の他者による文章を比較、分析および、評価することにより、批判的に文章を読み他者から学ぶ視点の獲得をねらった学習活動である。本タスクの考案は、ライティング能力向上には文章の理解力とともに文章評価能力の向上が必要であるとの仮説に基づく。これは、教員が一方向的にモデルを提示し学習者の文章を添削する伝統的な方法とは異なり、学習者に、複数の文章の比較を通して文章の構成等の種々の問題に注目させ、論文スキーマの形成を促すものである。タスク後には、学習者は同一トピックで作成した自身の文章を再点検した。本タスクを通じて、学習者は、文章の評価にも作成にも、文章の構成や論理展開により注目でき、また、現在と将来の学習自体へのメタ認知を高めることが期待できた。学習方略としてのメタ認知方略を、英語の学習成功者が巧みに活用できるという先行研究の知見も、本研究の第二言語ライティング学習者に該当すると考えられた。

第8章では、テキスト分析タスクを通じた授業において、論文スキーマを持つか、明らかに形成途上と観察される成功者による発言や、文章評価の際のコメントを、成功者とは言えない未成功者と対比しつつ分析した。その結果、成功者は文章の構成や論理展開の把握が適切に行え、自身の専門分野を意識したコメントも提示でき、個々の言語知識の多寡や、漢字圏か非漢字圏かの母語背景の差異とは無関係に、文章評価コメントの根拠の言語化に成功していた。一方、未成功者のコメントは未知の文法や表現へのコメントに偏ってパターン化が見られ、「難しい」とか「日本人の文体みたい」等と印象を述べても根拠が説明できず、成功者のケースとの顕著な差が見られた。成功者は意識的に言語学習を研究活動と結び付け、また過去の外国語学習の方法を想起する等の広い視野を有していた。コメントは一瞥で示し、また成功者のコメントをプロトコルとした、時空間を超えた教育リソースへの活用を提案した。

第9章では、各章を総括した上で全体的に考察し、今後の展望を示した。まず、ライティング教育では、文型等を盛り込んだ知識注入型やモデル提示型のリソースと教員の添削のみでは不十分であり、論文スキーマ形成のための学習者側の意識化、それを支える継続的な学習活動、およびそれらへの教員側の理解と検証が重要であると言える。他者から批判を受けるフィードバックこそが論文を含めた研究活動を活性化するため、教員はテキスト分析タスク等の協働的活動の重要性を認識し、かつ、メタ認知方略の活用を促せるよう、学習者の研究背景や学習環境を視野に入れた教育設計を行う必要がある。また、ライティング能力獲得過程は、言語項目を難易度の順に習得する過程ではなく、包括的なライティング活動を理解し、文章ジャンルや読み手への配慮に気づいて批判的な読みや自己推敲も適切に行えるようになる過程であると考えられる。さらに、専門の内容は専門分野の教員が、日本語の問題は日本語の教員が担当すればよいという比較的明快な教育内容分担論が存在するが、言語表現と内容を切り離して論じる困難さから、明確に線を引くことは容易なことではない。一方、研究遂行に必要なリテラシーの観点から、論文スキーマ獲得を促すライティング教育は分野の枠を越えたリテラシー教育としての位置づけが可能であると考えられる。

^{*}Swales, John. M. (1990). *Genre Analysis: English in academic and research settings*. Cambridge University Press.

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語アカデミック・ライティングという、社会的要請とともに近年盛んになってきている学問分野において、学習者ディスコースを質的な観点から分析することによって、有効な教育方法を開発・提言しようという実証的かつ実践的な論文である。具体的には、大学院レベルの日本語学習者に求められる専門日本語を、包括的なライティング活動として研究遂行に必要なリテラシー教育から捉え直し、従来から研究の対象となってきた語彙・文法というミクロレベルの教育実践のみならず、構成と論理展開などこれまで十分に研究が進んでいなかったマクロの観点からも論じたうえで、アカデミック・ライティングの認知面の基盤として「論文スキーマ」の養成という新しい教育アプローチを提案している。

豊富な一次資料に裏打ちされた説得力ある分析が、本論文の論述を支えており、今後の日本語教育に有用な貢献をするものと認められる。本論文は、先行研究の包括的な概観に始まり、日本語論文の論理構造の分析を行ったあと、これらの知見を基盤として、日本語学習者に特徴的に見られるライティング上の問題を、目的と構造化、関連と意義付け、厳密さと文体の最適化の観点から実証的に考察する。さらにこうした分析に基づき、学習者に論文スキーマを涵養し、これをライティング能力の育成に有効なメタ認知活動の基盤として活用するための教育実践を報告・分析している。とくに第7章の、スキーマ形成を目的としたテキスト分析タスクの開発と分析、およびそれを裏付ける第8章の学習者による文章評価コメントの分析は、この論文のもっとも価値ある部分であり、有用性、論理性、独創性のいずれの面でも高く評価できる。また、本論文において示唆されたように、資料のデータベース化、コーパス化を進め、さらなるタスク開発につながれば、専門日本語教育におけるさらに重要な貢献となる可能性を秘めている。欲を言えば、評価のあり方や論文スキーマの普遍性をめぐる議論の深まりも望まれるところであるが、それは本論文の発展的な課題として位置づけられるべきものである。

本論文の主張する論文スキーマおよびテキスト分析タスクは、協働的学習活動を通してメタ認知方略の意識化を図るという点で、学習者の母語背景や研究分野を超えた広範な日本語アカデミック・ライティングにつながるものである。今後の専門日本語教育の発展のための方向性と方策を具体的に提示しており、その意義と波及効果は大きい。

以上のように、本論文は、博士（言語文化学）の学位論文として価値あるものと認める。